○アリー氏北極發見の二報

るを見ても、如何に氏が探檢の成功せるかを知られる。

○北極に突進せる少佐

一行中終に北極に到着せるは少佐及び一名のエスキモー人で、コラムビア岬を共に出發したる他の數隊の白人等は、少佐が日に〳〵目的地なる北極に接近するに連れて歸途に就き、又た少佐と共に最後の突進を企てたるマシユー、ヘンソン氏及び三名のエスキモー人は今一息の所で終に落伍した。

二月二十七日船長バートレット氏及びボラツプ氏はコラムビア岬より、多數のエスキモー人と犬とを從へて北極に向ひ、四月一日には七名の白人十七名のエスキモー人及び百三十七頭の犬より成るペアリー少佐の一隊同所を出發したが、同四日には先發隊と共同して七日間野營に滯在した、日光は四月五日に至りて始めて認められ、觀測すれば北緯八十四度より程遠からぬ地點であつた、アルコール

の貯蓄減少せるよりコラムビアなる貯藏庫に向へるボラツプ氏は、十四日再び一行に合して多量のアルコール及び脂肪類を持ち來り、ロツス、ジー、マービン教授の一隊も亦同日ペアリー少佐の一隊に加はつた、而してロナード、ビー、マクミユラン教授は、足部に烈しき凍傷を受けたから送還せられ、ボラツプ氏は八十五度二十五分の地點より二名のエスキモー人と共に歸途に就いた、今やペアリー少佐の一隊は、バートレット氏、マシユー、ヘンソン氏及び少佐の從卒なる異人種より成りて、是にエスキモー人及び七臺の橇と六十頭の犬は共に再び北方に向け出發した、氷野は眼の及ぶ限り渺々と連り、バートレット氏は四月二日に至り北緯八十八度の地點から歸路に就き、翌三日の朝ペアリー、ヘンソン及び三名のエスキモーは四十日間の糧食を携帶して最後の突進を企てた、同日は十時間の進行によりて二十哩を踏破し北緯八十九度に近き地點に於て就眠した、此日百オー

ペアリー氏北極発見の二報

ド許なる薄氷の所を過ぎたが、橇一臺は破壞せられ三名のエスキモー人は危く溺死する處であつた、然れど氷野は尙ほ歩行に堪え犬は元氣旺盛で一日能く二十五哩を進むだ、次の觀測は八十九度二十四分の地點に行はれ、次には八十九度五十七分に行はれた、濛々たる霧を衝いて進めば、四月六日終に北極の氷野は出現したペアリー少佐は此處に星條旗を樹つた、寒暖計零度以下三十二度、北極は只無限の氷海で、ペアリー氏は海深を測量すべく試みたが千五百尋に於て尙ほ海底に達しなかつた、氏は北極に止る事三十四時間四月七日終に返つた、歸路に着いたペアリー氏及びエスキモー人は、非常な疲勞と到る處の吹雪と戰ひつゝ歩行し、遂にバートレット氏の殘した氷室に至りて始めて就眠した、斯くて四月二十三日一行はコラムビア岬の西方なる陸上氷河の絶端に達した、エスキモー人等は陸地に達せるを見て雀躍し、疲勞の極に達せる一行は此處にて四十八時間に渉る熟睡

を貪つた、斯の如く疲勞の途を急ぎて、四月二十七日漸くローズベルト號に達する事が出來た、三月二十六日二名のエスキモー人と十七頭の犬を伴ひて歸路に着いたるマービン教授の訃音は此處で土人より轉聞した、即ちエスキモーを後に殘して出發したる教授は、やがて二十五ヤード許り解氷せる間に死體となりて發見せられた、されど、エスキモー人等は溺の迷信よりして、教授遺留品は一切持歸る事なく、只其事實をローズベルト號に報告した斗であつた。

○ジエグレル氏北極探檢

之より先ジエグレル氏總裁となりエ、フイアラ氏が指揮せる探檢隊はアメリカ號に乘じ明治三十六年、ノハヤ、セムリヤ諸島を經て北極地方に向つた、ジエグレル氏が同年九月末に探檢隊員より領收せる通信に依ると、アメリカ號は北緯七

十五度の所で既に流氷中に閉鎖せられて進行する能はず、其の流氷の緣に沿ふて航したが出道を失ひ、其後フイアラ氏發信の頃はアメリカ號は西方に航走中であつたが、東經四十六度か或は四十七度の邊で通路を求めんとしつゝあつた、探檢隊員は多數の犬及び數匹のシベリヤ馬を有つてゐたと云ふ事だ、其後は消息なかつたが、同年及翌年夏期中ノハヤ、セムリア附近で流氷を碎きて北進せんとしつゝあつた夏期は氷塊中に閉鎖せらるゝとの事であるが、諸威捕鯨船は同探檢隊捜索の爲にジエグレル氏の命により明治三十七年四月トロムスウを發した。

さればテラ、ノヴア號は明治三十八年五月より、ジエグレル氏の買入るゝ所となり、フランツ、ジョセフランドの探檢に向つた、此の目的は去明治三十六年アメリカ號を以て同地方に向ひたるフイアラ氏の探檢隊を捜索せる爲め出發したものである、かくて、テラ、ノバ號は無事其の使命を完し、同年八月十日トロムス

ウに歸航した、同船は航海中六月十九日北緯七十五度十七分、東經三十六度二十六分の地に於て既に氷野を見たので、同月二十四日進路を稍東方に轉じ、霧のため頗る困難を感じたるもサルミ島を見たのは七月二十八日であつた、捜索船長ヂロンドは翌日到着し、此處にて不思議にも最早や行衛不明ならんと思はれたジエグレル氏一行中の六名に邂逅したので、飛び立つ許りに喜び其無事を祝し、直ちに橇を用意し人を派してフイアラ氏の本營に向つた、其間にテラノバ號はフロラ岬に達したが、フイアラ氏一行の二十一人は無事救助せられて、甲板上にゐた、ヂロン岬に歸航した時一行の殘餘は凡て收容せられた、船は八月一日歸航の途に就き、幾多の困難と戰ひて終に其目的を達する事が出來た、然れどもフイアラ氏一行の探檢隊が其前年の如く功果を收むる能はずして空しく氷中に鎖され、餘儀なく追ひ還されたのは誠に悲しむべきことである、即ち合衆國の旗を高緯度の地

ミツケルセン氏北極探檢の計畫

に進めんとするの企は、不幸にも挫折した、ナンセン氏がカグニス氏等の探檢も目的の如く北進する能はず、バルドウイン博士等亦最初の探檢以來何等の成功なく、北極探檢は當事一大困難の事業と成つた、然れどもアメリカ號探檢失敗の善後策に關しては有名なる現合衆國地質調査所のピーター氏之が任に當つたので、近年に於て果して目醒しき活動があつた。

○ミツケルセン氏北極探檢の計畫

又明治三十九年二月二十一日英人ミツケルセン氏が紐育への通信によれば、氏等一行は北極探檢の準備のため無事ビウフオート海まで到着した、此所で一行は亞米利加地理學協會から三千弗の救助金を與へられた、然れども更に北極探檢に使用すべき船舶は如何なるものを以てするやに就ては未定であつたが、之に

ミツケルセン氏北極探檢の計畫

對する三氏の意見は合衆國政府の沒收せる無免許漁船中補助機關を有する二本帆檣の帆船を用ふる豫定だと云ふ事であつた。

○ベットフオールドの命名

曩日の探檢船はベットフオールド號と命名し明治三十九年初夏ヴキクトリヤを解纜した、本船は六十六噸の汽船で水線の上下は氷壓に對して特に堅牢ならしめた、他の一隊としてマッケンヂー河を降れるものは、レッフインゲル、ステフワンソン、ヂットルセン等で、是等の諸氏は今既にベーリング海峽を通過し、シベリヤ沿岸で多數の犬と二三の小馬を得て北進せんとするミツケルセン氏と、八月二十日頃相會すといふ事であつた、ミ氏が此の航海は流氷を免れん爲め成るべく大陸に沿ふて進むべく、パロー岬よりは特に注意して潮流の觀測に着眼し、ハリソン灣とハーセル島間に起る潮流の十二時間の急激な變化に對しては、乘組員

は一層の趣味を以て之を觀測し、それより遙かに東進してバサースト岬を東方に望み、ウエール親王海峽を横斷し、プリンセスロイヤル島には其糧食假令ば獵にて獲たる鮮肉の如き食料品の倉庫を設置せんとした、かくして愈々明治四十年の春に到るや糧食整理委員は直ちに多量の供給をなし、先づメルビール島を横斷し次ぎに、プリンス、パトリック島に上陸し、これより氷上を疾走すること六十哩、若し出來得べくば一行は此間に深度測定の新法を適用し、以て北極に於ける海底の狀況如何と云ふ問題に嶄新なる材料を提供するであらう、時來りて堅氷漸く融解すれば、ベッドフォード號は其航路を北に取り、遙か後方に在る乘組員は彼等が科學的探究を擴張して、バンクス島の南端なるネルソン角を超え沿岸に沿ひてバーネット灣にて進行すべく、此處にて船は明治四十年秋まで或は若し都合宜かりせば明治四十一年夏まで碇泊し、それより歸航する筈で、明治四十一年

春三人連の一組は犬と小馬とを從へ百五十日間旅行の準備をなし、氷上を西北西に突進し、彼等が能ふ限り北方に進み海棚の外緣を既に經過し去りしと推測の現示するまでか、然らざれば陸地の發見せらるゝまでか、或は西經百五十度北緯七十六度三十分の地點に達するまで進行する意氣込みであつた、一行にして若し彼等が最初の希望實現され、大陸の發見さるゝことあらんか、彼等は其觀測を繼續し益々北進して彼の海棚の位置を定むべく、糧食若し欠乏せば北東に進路を轉じ、以てウランゲル島に進むか、或は事情の許す限り同東海岸に進行するであらう、最に引還したるベッドフォールド號は第二の冬季を此處に碇泊しバーネット灣に於て科學的調査に從事すべしと雖、亦或場合に於ては觀測者は此處に止まらないで、他の一隊と共に歸航の途に就くことがないとも限らないと云つて居る。

○ベッドフォード號遂に難破す

ウエルマン氏の飛行器北極探檢

明治四十年九月七日の紐育電報によれば、兩三年間の豫定にて、明治三十九年五月ミッケルセン氏指揮の下に、ベッドファールド號に搭じて出發の英米北極探檢隊は、明治四十年八月ビューフォード海附近で難破したとの報導確實となつた、一行の消息はバーロー岬で最後の音信あつた外其後沓として何等の報あるなく、數多の危險に遭遇し不成功に終つたと云ふ事である。

○ウエルマン氏の飛行器北極探檢

米國のウオルターウエルマン氏一行は、明治三十九年七八月頃、スピッツベルゲンより空中飛行船に乘じて北極探檢に向ふ由なるが、同飛行船は二十五日乃至三十日間空中に游揚するに堪え、一行五名と其七十日間の食糧及機具一切を積載し得るもので、尙無線電信機を据え付くる筈で、若しスピッツルゲン及諾

威のハンメルフエストに受信機を設くるに到らば、一行は探檢中日々其狀況を通信し得べしといふ、ウ氏は既に二回まで極地に達せんことを企てたる人で、今回は空中飛行器を利用して、其の目的を達せんと企てたのである、其の事業に要する費用はラウソン氏之を擔當し、若し成功したる曉には更に經費の支出を惜まないと云ふ事だ、ウ氏は巴里のルイゴダール氏に空中飛行器の注文をなした、此飛行器は八十馬力の發動機三臺、鋼鐵砲一門、機乘員五名、七十日間の食料品ガソリン五千五百斤並に其附屬品、錘測用鋼線二千二百尋、無線電信機數個を容積し得べき長さ十六米の鋼鐵製の籠船を飛揚するに足るべき裝置をなし、氣球は三重の布張りとなし中二枚は綿布他の一枚は絹布を用ひ其表面をば極めて滑かならしめ、濕氣、雪、霧等の其面に停止せざる樣に勉めた、發動機は一時間に十七地理里を飛航すべき速力を有する機械で、ウ氏は夏季に於ける此の地方の風力より

ウエルマン氏の飛行器北極探檢

案出し、七八兩月中の風力の五分の四に耐ゆる裝置をなし、若し風力強き時は導索を用ひて錨を曳かせ、地面より遠隔せさることを期した、米國地理學協會は此準備により、明治三十九年夏季に出發すべく、若し天候不順なれば、明治四十年を待つ事と成つた、汽船フリッヂョフ號は該探檢の諸材料を齎らし、スピッツベルゲンの北東陸の北西海岸、北緯八十度二十分に位せるラウ島へ航行する筈で夫れより空中飛行を十日間に擧行する豫定であるが必要に際しては二十日乃至二十五日間空中に飛航する。

右計畫は數年前アンドレー氏が試みしものと同一で、氏は不幸にも中途失敗に終つたが、此の壯擧は極めて有望で且充分冒險の價値がある、而して特にナンセン、カグニー等諸氏が觀測せし如き極地內部の氣象を觀測し得んゝ爲め、普通の氣球より殊更に空中飛行器を撰むだのは、其當を得たものと云つてよい、因に云ふ

アンドレー氏の用ひた氣球の危險なりしは、實に極地附近の結氷せる海面の空氣に固有な無風帶であつた、然れども今回の飛行器は其の危險遙かに少く、只凍氷なき海面から極地無風帶に移らんとする間、帶をなせる暴風帶を航行する時に多少の危險あるのみと云ふ、其後ウ氏の詳しき消息に接しなかつたが左に掲ぐる二三の電報は以て其一端を窺ふに足る。

氏は明治四十年六月一日諾威の北方六十四粁に位せるスピッツベルゲン群島に向け渡航し、同所より風船マンモス號にて、七月末北極に向け出發すべく、該風船には人員十二名乘組み、短艇、橇、犬及び十ケ月分の食糧を搭載されると云ふ。（一九〇七年五月廿四日發ロイテル電報）

米國の探檢家として有名なるウ氏は今夏期を利用して輕氣球又は飛行艇を以て再び北極探檢をなす由なるが、先づ本月紐育を出發して巴里に赴き、諾威を經

ウエルマン氏の飛行器北極探檢

て深く北極に達する筈なり。

北極洋スピツツベルゲン島のウ氏輕氣球倉庫は暴風のために破壞せられたり、爲めに本年中北極探檢發向は疑はし。（一九〇九年六月廿九日路透電報）

○空中飛行器探檢

空中飛行器の泰斗ライト氏は飛行器に對する自己の意見を發表して曰く、現時歐州各國に於ける飛行器の現狀を以てせば、到底攻擊的武器として之を使用するは不可能で、北極探檢には最も適當なる利用法であらう、米國に於ける一飛行器アメリカ號は目下北極探檢を企て近々發程、來る八月には其の目的を達する由で現に根據地をデール島に設け之が準備に着手せるが、同島は北極を距る七百哩、根據地より北極間は毎時十八哩の速力を以て三日間に往復し得る豫定だ、同飛行器は頗る巨大で、電動器二臺を据え付け、ガソリン六十斤を搭載し得るもので、

其の行動範圍は二十哩に及ぶと、尙陸上行動用として三個の橇、一隻の小端艇、エスキモー犬十頭を搭載すべしと、果して其の實行を得ば飛行器の効用と共に其の探檢は世界に稗益する事が多大であらう。

○クツク氏の北極發見

往日米國電報は彼の北極探檢家クツク氏が本國に歸着するに際し、其の歡迎は個人として空前の盛況を極めたと報じた、氏は昨明治四十二年九月一日ベルウキツクショイトランド島より丁抹コツペンハーゲンに向け、其北極發見を發表すると殆ど同時に、ペアリー氏も四月六日北極を發見せる旨を發表し、果して兩者の何れが第一人者なるかの問題頻々として內外に持上つたが、左に右第十世紀以降幾度か其の發見を企てゝ成功せざりし此の探檢も是にて一段落を告げたるものと

クツク氏の北極發見

クック氏の北極發見

成つて、月桂冠はペ氏の頭上にかゝつたが茲にク氏の言ふ所を述べよう。

○探檢に從事したる由來

ク氏今回の北極發見は、實に偶然の動機から起つた、初め氏は其親友なるジョン、アール、ブラッドレー氏の招待に應じて其の所有漁業船ブラッドレー號といふ小船に乘じ、北海の漁獵を試みる爲めに、明治四十年六月三日グローセスターからブラレードア海岸に向つて出帆した、ブラットレー氏は紐育の一大富豪で、非常に各種の冒險的狩獵を好み、クック氏とは同氣相求め、剩さへ、船長モーゼス、パートレットは嘗てペアリー氏に從ひ、其探檢船ルーズベルト號を操縱して北極探檢の途に上つた者である。

船上に氣焰を吐きつゝ船は北進して、軈てラブレードア海岸に沿ふて進めば、天候俄かに變じ北海有名の大暴風となり、船は揉みに揉まれ加ふるに山の如き氷

塊は四邊より流れ來つて、船は其の推進器を折られて進退の自由を失つた、船員は何れも死力を出し千辛萬苦の末辛ふじて北星灣に上陸し、數日の間獵漁を事として此處に滯在せる中、クック氏は初めて北極探檢の大野心を起し、遂に一日其の計畫をブラッドリー氏に打ち明けた、氏は此の所信を聞いて取り合はなかつたのでク氏は一人にても探檢の途に上ると稱し只管準備に着手した、ブ氏は其の決心の固きを見て、愈明治四十年八月にク氏と少數の同行者を殘して、自からブラッドレー號に乘じて紐育に歸來する事と成つた。

さればク氏はパートレット氏を顧問として、各種の準備計畫に怠りなく、從來の北極探檢家が常に氷山の爲めに失敗せるに鑑み、初春の候を期し翌年二月を以て遠征の途に上るの決心をなし、斯る間に船の修繕も終はりやがて一行が北と南に分る可き日は來た、即ちあり丈の三鞭酒を傾けて別離の杯を擧げ、行く者歸る

者其の健康を祝し、愈々其日ともなれば船は碇を捲き、順風に帆を上げて南進しブラッドレー號は其年十月無事紐育に歸着した、ブ氏は出迎の人々にク氏の消息を告げて曰く、ク氏の決心鐵よりも固し三ケ年間を期して北極探檢の所志を貫くべしと。

○岩をも貫く決心

ブ氏等が紐育に歸國するに際し、一行中のルドルフ、フランク氏はク氏の探檢に要する諸般の準備を扶け、且つ諸種の食料其他の必要品を供給せんが爲め特にク氏と共に殘つた、二人は二百五十名の土人を指揮して、日夜準備を急ぎ永き冬期の中に早く諸般の設備を完成し、其間一方には絶えず數名の先發隊を出して沿岸の通路を探檢せしめ、傍漁獵に從事せしめた、斯くて明治四十一年二月十九日の東雲頃ク氏は愈々北極探檢の途に上つた、一行はク氏の他、十名のエスキモ

一人と、十一人分の橇を曳かしむる犬百三頭とのみであつた、如何に此の探檢が從來のそれに比し極めて無謀な冒險的の者なるかを知るに足る、されどク氏の胸奥には岩を貫く決心があつた、そはフランク氏に與へた「余は成功を期す、少くとも絶望的努力を試むるの決心なり」云々の文何でも察せられる、斯くの如き決心を以て、一行はグリーンランド岸を發しスミス海峽の浮氷の間を縫ひつゝ針路を西方に突進した、北方の夜は永くして日光を仰ぎ得るは一日の中僅に數時間に過ぎない、風凜烈、寒徹骨、北に進むに從つて寒益加はり、犬凍え人慄れて辛苦名狀する事が出來なかつた。

○中途に歸る者

其後船はナンセン海峽を過ぎて直進し、行く〳〵獵を得て牡牛百一頭、熊七頭三百三十五頭の兎を獲、毛皮を剝いで防寒衣を造り肉は食料として携帶し、北進

クツク氏の北極發見

して三月十八日ハーパート島の南部より愈〳〵北極海に進入した、然るに六名のエスキモー人は早くも探檢の困苦に疲れ、ク氏の止むるをも聞かず中途で引き返した、氏は餘儀なく四名の土人と四十六頭の犬を率ゐて尙も前進し、愈〳〵極に近き大浮氷群を横ぎり僅三日を經ざるに又もや二名の土人は弱つた、されば ク氏は今や僅に二名の土人と廿六頭の犬を率ゐて、心强くも寂寞の旅行を續けた。

○一行病魔に襲はる

かく ク氏は兩名のエスキモー人と共に北進すれば、寒暖計は次第に降下し寒愈〳〵烈しく、三人相擁して暖を取り、時には乾肉と一杯の溫かき茶を啜つて寒を凌ぎ、時々獵を行ふを唯一の慰藉とした、然も空は次第に曇り三月三十日漸々地平線の彼方に一の新陸地あるを發見し、一行は初めて北緯八十四度四十七分西經八十六度三十六分の地點にある事を知つた、一行は更に浮流する大氷山の上を傳ひ

ながら北進した、當時一行の期するところは、目下の困苦に打勝つ事のみ、如何に元氣なる一行も出發以來既に一月有半、其間の困苦と疲勞の爲め何れも半病人となり、疲れたる足を引き摺りながら尙も北進を續けた、然るに四月七日の眞夜中、ク氏は突如北方の氷上に太陽を目擊した、夜半の太陽、只極地にのみ見るべき光景だ、翌八日一行は北緯八十六度三十六秒、西經九十四度二秒の點に露營し北極は今や僅に二百哩の彼方に近づいた、此邊より地は稍平坦となり犬は三名の重き木橇を曳ながら、頻りに喘ぎつゝ幾劫の昔より神秘の境と封ぜられた氷上を進み十四日には、正に北緯八十八度二十一分西經九十五度五十二分の地點に達し、極を去る僅に百哩となつた。

○北極に星章旗

一行は勇氣百倍したるも、氷點以下四十度に達し、際涯もなく流れ來る流氷は

幾度か一行の通路を遮り、歩々困難を増し、成功の目前に近けるにかゝはらず、其夜の露營を定むるに雪を堀て穴小屋を造る勇氣さへも無く、亙寒の氷上に抱き合ひて一夜を明かす程に疲れ果てた、行くに從ひ蜃氣樓を認めて思はず胸を躍らす事もあつた、されど一行は其幻影の本体に向つて自ら生死さへ疑ふ程妄動的に進むだ四月二十一日の觀測は正確に北緯八十九度五十九分四十六秒を指し、北極は既に指頭に近づいた、三人は我を忘れて殘りの十四秒間を驅け足に進み、ク氏は幾度か度を測れり、幾度測るも今氏の立てる地點こそ紛れなき北極なれ、二士人は北極と連呼しながら相擁して氷上に踊つた、ク氏が携帶の一流の星章旗は地軸を貫いて翩々として氷風に飜へり、士人は再び踊りク氏は萬歳を叫むだ、時は明治四十一年四月二十一日北緯正に九十度溫度氷點下三十八度であつた。

首を回らして四邊を望めば、氷野茫漠、天地寂然、一行はしばし默然と佇むだ

聽て二名の土人は天幕を張り滯留の準備に着手し、此間にク氏は諸般の研究に從事し、極地に滯留する事三日、氷上に立てたる米國旗に別れを告げ四月二十三日再び長き歸途に就いた。

編者曰く、クック氏は性質極めて溫良なる人なるも、今や無類の詐欺者として一人も氏の探檢を信ずるものがない、氏が果して詐欺者なりや否やは、北極に赴きたるものに非ざれば之を證明する能はずと雖も、海外電信の報ずる如く、ク氏の探檢は全く否認せられたれども、氏自ら絶望して敢て之を證明することを力めざるに於て、氏の探檢を信ずるは無益の事である、然れども氏にして歐米人の最も嫌忌する猶太人に非ずとせば、或は氏の探檢を充分に證明する機會を得たるかも知れない。

○アムンドセン氏北磁極探檢隊

南極探檢に有名な諾威海軍將校アムンドセン氏は、地球磁力の極點探檢の爲め普く有志の醵金を請ひ、其の金額を以て一小船を建造しジョワ號と命名し、之に所用の諸器械と五ヶ年分の食糧とを搭載し、去る明治卅六年六月十六日綠州に向て出發したが、同探檢員は其後スミス海峽附近のダルリンプル、ロックに於て諸威の一捕鯨船と會する筈であつたが、此捕鯨船の海員等は其の豫め指定の場所で探檢隊と出會ふを得なかつたので、故に其の行衛は當時不明であつたが、當時は天候殊に險惡で且つ結氷の狀態も極めて惡かつたから、人々は同探檢員を乘せたジョワ號の如き、積載噸數少き船体に異常なからん事を切に希望してゐた。然るに當時學界の注意の惹いたアムンドセン氏一行の消息は、其後諾威一捕鯨

船の亞米利加北極群島よりクリスチャニアに歸航したものゝ報に依れば、同船はバロウ海峽でア氏の信書を受取つた、此信書は明治三十六年八月の日附でビーチエー島の南西角、北デボンで認めたるものだ、其言ふ所に依れば、同探檢隊はメルビール灣の北方に位せるダルリンプル島に一の貯炭所を設けた後、明治卅六年八月十六日此地を出發しランカスター海峽を經てビーチエーに達し、航海中若干の氷塊に會し、磁力觀測及び地質調査をした、途上ランカスター海峽で、其地に設けある北極探檢に有名なるフランクリン氏の紀念碑を見たが、其碑は完全な形で存在して居た、信書留置後はビールサウンドに進行しビーチエー島で冬籠する筈であつた。

アムンドセン大尉の探檢は漸く其後實行を見るに至つた、探檢家はア氏外七名の從者より成り其船ジョワ號は白令海峽より來り、ビーチエー島で太西洋より來

るべき英國船インベスチゲートル號と會合する筈だが、氏は故ありて船を氷中に捨て、ビーン島とバンクス地との間は流氷上を歩行したるを以て、本航路の全部を航海したと云ふを得なかつた、明治卅六年中大尉は諾威國を出發し、ランカスター海峽より亞米利加北極群島の中間に進行したが、其北デボン地の南西角に至るまでは流氷少きを以て航海に左程困難を感ぜなかつたが、ピール海峽に進むに從ひ進行愈〻困難となり、九月十二日を以て、遂にキングウヰリアム地の海岸で冬籠をなすの已むなきに至つた、此の地點に於て大尉は二十三ケ月間滯在することに決し、且つ此の地點は磁極の附近にあるから地球磁力の完全な觀測に從事した、而して其長日月の間には、氣象の觀測並に各學科の點から此附近地方を研究したが、吾人に對して最も重要なる効果は北緯七十二度十分に至るまでのヴイクトリヤ地の東岸の測量である、明治三十八年八月十三日探檢隊は再び

進行を始め、北西海路の通過を完了せんが爲め船首を西方に轉じて進行した、然るにシンプソン海峽内の航海は其水路狹くして幅は僅かに七百五十米なるのみならず、淺堆極めて多いから航行殆んど不可能となり、海峽の最も狹い所では海底極めて淺く、深度五米四となり、辛ふじて此海峽を出で非常な困難辛苦を嘗めて、遂にキングウヰリアム地とヴイクトリア地との間に遁れた、此處は北緯六十七度十分より同六十八度三十分、西經九十九度三十分に當り、百有餘の小島より成れる一群島がある、其航海の困難は推して知るべく、又是等群島の間に通ずる水道は淺堆多く極めて淺い。

八月十六日ジョワ號はヴヰクトリア地と其對岸なる大陸部の海崖との間に通ずる海峽を通過し得たるが此の海峽も亦必要な深度に乏しく航行の困難なこと到底名狀されない、十五日間の航海の後ア氏はマッケンヂー河口附近に達し此處にて

アムンドセン氏北磁極探檢隊

又もや氷中に閉鎖せられた、ジョワ號は北緯六十九度十分、西經百三十七度四十五分、キングスポイントに於て冬籠をなし、探檢隊長は橇を驅りて、ユウコン河畔に在るアラスカのキーグル市に程遠からぬホルト、エグベルト電信所に到りて電報を以て茲に記載せる重要な報告を吾人に傳へたが、其後明治卅九年の春同探檢隊はベーリング海峽へ無事到着し、所謂北西航路を全部通過する豫定で、該探檢成功の曉は尙ほ進みて北東航路に依りて本國に歸り、茲に北極地方の周航を完了せんとする大計畫の由であつた。

明治三十八年九月諾威國王の手許に達した電報に依ると、氏の乘船なるジョワ號は北米大陸の北海岸を首尾よく航行し、豫定の如くアラスカのノーメ岬に着し、航行目的の殆ど全部を完了したが、こは即ち多年の問題であつた北西航路に解決を與へたものだと云ふ事だ。

丁抹國

○エリヒセン氏探檢隊

明治卅六年六月十六日、クリスチャニアを出帆した諾威國の北方磁極探檢隊に會合せんとして果さなかつた捕鯨船は、ダルリンプル、ロック附近で、曾て綠州西海岸に於けるエスキモー人の風俗傳說等研究の目的で、明治三十五年丁抹を出發した探檢員の一部に會合した、此の探檢員等はサンデルス島でエスキモー人と共に住居し居たが、船舶のなかつたので陸地の海岸に歸着することが出來なかつた、捕鯨船の英國海員等は之を氣の毒に思ひ、彼等が歸航のため小舟を造り得べき木材を與へ置いたが、天候不穩であつたから、遂に其計畫を果さなかつたが、而も明治卅七年一月二十日此の島地を去りメルビール海灣の氷上を渡り、

エリヒセン氏探檢隊

綠州東海岸のウベルニヴイクに達し、夏季を待て歸着したといふ、此の丁抹探檢隊はミリユス、エリヒセン氏の指揮せるもので、同行者には、モルトケ伯、ラスミエセン氏等があつた。

明治三十九年六月を以て綠州北東海岸探檢の爲め、ミリユス、エリヒセン氏等指揮の下に、丁抹探檢隊組織せられ、コツペンハーゲンを出立した、當時の計畫は左の如し。

北緯七十五度と八十三度との間を探檢する計畫で、未探の區域ビスマーク岬以北は、一八七〇年第二回獨逸探檢隊に發見せられたが、此の探檢は船長コルデウエー氏の事業で、僅かに一小部分に止まつた、此の地方は明治三十八年極地探檢の途に上つたオルレアン公御搭乘のベルヂカ號も探檢した筈である、ベルヂカ號は曾てド、グルラーシユ氏指揮の下に北海岸を北緯七十八度十六分まで航行した

ものであ、綠州北東岸に於ける沿岸航海に於ては、最も北東に達したものだ、グ氏は此の勇敢な探檢に關して、終に次の如き報告を齎した、曰くビスマーク岬が大陸の一部でなく一の島をなし、又ドーベ灣は其間に通ずる海峽なるを確めた、故に當時の探檢隊は要するにベルジカ號の發見を尙一層完了する目的で、指揮官の外に醫師、動物學者、生物學者、畫師各一名より組織せられた、一行は諾威より捕鯨船を買ひ、特にデンマルク號と命名した、同船には海員の外猶氷上橇行に使用す可き犬七十頭を搭載した、エリヒセン氏は明治卅九年四十年の冬を、北緯七十五度の地に冬籠し、明治四十年三月より上陸して、分遣隊を組織し、犬を率ゐて北進の途に就かしめ、又此隊を各三人より成る四小隊に分ち、以て各方面に向はしむる筈だ、以上の各分隊は一應七月を以て本船に歸り、以後更に南方に進み、多年此の地方に存在したエスキモー人の舊遺蹟を尋ぬる豫定だであつた。

エリヒセン氏探檢隊

本船は明治四十年の夏期に巡航をなし、フランツ、ヨセフランド狹灣を探檢し若し事情の許すあらば進んで此の狹長なる灣の最北端に、それより內陸氷を橫斷して綠州の西海岸に達する計畫であつた。

以上の豫定終るの後は、北緯七十三度附近に於ける灣內で、翌冬季の越年をなし、明治四十一年の夏期を待つて本國に歸航する筈であつた。

○エリヒセン氏探檢結果

尙明治四十二年一月倫敦地學協會報告たるデンマルク號探檢の記事概略を見るに、デンマルク號の隊員十七名、乘組員十名、外にエスキモー人三名、犬百頭で綠州の北東部未探區域調査の目的を達して。今や綠州中人跡未到の地無きに到つた、明治三十九年六月丁抹國を出發し、綠州近傍にて流氷の間を經過し北緯七十六度三十分なるピスマーク岬に達せしは八月十三日であつた、此處を根

據地として附近の探檢をなし、明治四十年二月には橇十臺を以て北進し、二隊に分れ第一隊はエリヒセン氏外二名にてリグスダゲン岬より西に向ひ、第二隊はコツホ氏外二名で北行し、ヘアリーランドの北端ブリヂマン岬に達し、茲にベアリー氏の探檢と連續することを得て、成功を齎して六月歸航した、然るに第一隊は氷雪漸次融解するに逢ひ橇行不可となり、歸路を急いだが行程遲々、食糧飲乏犬を屠りて食に充てしも遂に叶はず三名共記錄を殘して、十二月に死亡したるを發見した。

今度探檢した地方はフレデリック第八世地と名づけ、其の北西ベアリーランドに對する所は隊長の紀念のためミリウス、エリヒセン地と名づけた、フレデレッキ第八世地は峽灣島嶼多く、現在氷河多きは固より、氷河時代の氷河の痕跡がある、此地の北東端は半島となりて東に突出し、西經十二度に達するを以て此處と

エリヒセン氏探檢隊

スピッツベルゲンとの間の海は頗る窄められ、ナンセン氏が此間に海底山脈存在すべしと主張したのも尤のこと、思はる、冬季は陸上殆んど雪に掩はれ、春季には多少蒸發するが温度は華氏の二十一度位である、融解せる氷は小川となりて氷河の下を流れ、洞門の奇景を造る、夏季は急激に來て氣温氷點以上に昇り河水激し、鳥には松鷄、鴉、鴉鵜、千鳥、鷺、鷹あり、獸類には熊、麝香牛、狼あり、秋季に唇氣樓あり、風向は常に北西、天候は靜穩なるを常とするも、時として低氣壓到り大吹雪となりて二三日繼續する事がある。

○エリヒセン氏の末路

今より以前丁抹の探檢家エリヒセン氏は綠州遠征中不幸樞の中に死去したが當時エ氏を捜索せんとした遠征隊は食料欽乏のため、目的を達し得ないで歸國したが、明治四十二年六月丁抹政府は再びエリヒセン氏の遺骸、日記及び北極獨立灣をも包容せる全綠州を完全に作圖せる地圖等を探るため遠征捜索隊を派遣した旨が同年の倫敦電報に表はれた。

○ジャンセン氏の漁場發見

近時蘇格蘭及びアメリカ捕鯨船の海獸獵の盛となつた結果、北極海面に於ける海獸類頗る減少し、從て綠州住民は糊口の資を失ふに到つた、丁抹政府茲に顧み、其の狀況を調査し、住民をして他に新工業を求めさしたが、採掘工業は將來餘り有望のものでないと云ふ事で、政府が漁業を奬勵し其の施設に着手するや、ジャンセン氏監督の下にガルフエ號を派遣して綠州の西海岸探檢をなさしめ、フアビル岬からウベルニウキックに到るまで海岸に於ける漁業の富源を研究し、其結果海岸に沿へる海底の性質、大陸基盤の周圍及び海底の淺堆等につきて貴重な漁場を發見し、將來綠州人をして歐羅巴式漁業を營ましむるのみならず、相

北極洋に於けるオルレアン公の巡航探檢隊

當の發動機を備ふる漁船使用の習慣を養成せしむる筈だ、尙現今使用しつゝあるカイアク型の漁船及び臘肭獸の皮で作りたる船の如きは到底大規模の漁業に使用することは出來ないと云ふ事だ。

白耳義國

○北極洋に於けるオルレアン公の巡航探檢隊

嘗て白耳義國南極探檢に使用して有名なベルジカ號を以て、オルレアン公は明治三十七年五月北極洋に向つた、同船は再びド、ゲルラーシユ氏によりて指揮せられ、巡航の目的は科學的事業をなすにありて、ベルゲン臨海生物學研究所より研究に關する國際委員會と連絡して遂行する筈だ、又陸地の探檢せらるべき範圍は、特にレカミエール博士、コーフアードの二氏を派遣した、研究材料は北海の

はジャン、マエン、東綠州、スピッツベルゲンで、兼ねてジエグレル氏の北極探檢隊の消息を明かにするにあつた。

明治三十七年九月初旬氷州に於けるレイクジャイウイックより瑞典に到着したる報によると、ベルジカ號に乘込みし公及公の一行は無事綠州の東海岸に着し其極北に達したのは七十八度十六分即ちビスマーク岬の北で、これ實に四十年前コルデウエー氏指揮の下に、獨逸探檢隊に依て發見せられた所、同岬は大陸でなく一島嶼に於て存し、其鳩灣は海峽中に存した、獨逸人の探檢後東綠州の此の北地は假令ナエロ大尉のあるあつて、北緯七十五度三十分に達し、又明治三十三年諾威の捕鯨家のあるあつてシャンノン島に達したと云つても、極北の探檢地は一六七〇年に老捕鯨家ランバート氏の到着したと稱するものと、十八世紀に於てデインス、バリントン氏亦同海岸の此高緯度の地に達したと云ふものと

北極洋に於けるオルレアン公の巡航探檢隊

二つなれども、兩者の事實は尙疑問の裡にある、即ち其眞に北極探檢の實を完うし從來の事實を完成し、以て海洋學上に貢獻せしものは公の今回の擧なりと云ふがよい。

○綠州東海岸探檢の結果

公が去る明治三十八年夏季に試みたる極地巡航の結果は、吾人に對して地理學上有益な新智識を與へたるものである、該探檢隊の科學的參謀としては、地形學者として、瑞典の軍人ベルヂエンダル、海洋學者としては丁抹人コーフアード外に佛人レカミエール氏あり、ベルジカ號は同年六月三日諾威國のツロムソウを出帆し、夫れより漸次スピッツベルゲン附近に往き、此地を起點としてフランツ、ヨセフランドに向はんとしたが、其の計畫は遂に失敗に終つたので、綠州東海岸に向ひ、其の航行中は絕えず爆發物を用ひて氷山を破壞し、徐々に進行し

其の到達地點は北緯凡そ七十六度四十分で一八七〇年四月コルドウエー、及びベーエル兩氏が、第二回獨逸の北極探檢隊に依りて發見した海岸に於ける極北の地と知られた、然るに公の探檢に依れば、此の到達岬は綠州と全く分離せる島地で、其間には一の水道あることを發見した。

又探檢隊は其の北方に於て屈曲少き海岸の存在を認めた、此地は特にテールド、フランスと命名した、又た此地の稍突出せし岬角をなせる處には公の名に因みフイリツプ岬と稱へた、此處にエスキモー人の住居した遺蹟がある、これに依ればエスキモー人は最初綠州の西海岸に棲息し漸次北方に移動し、更らに東海岸に沿ふて南下したもの〻樣だ。

ベルジカ號は此の海岸に沿ひて北緯七十九度まで進行したが、遂に高さ一五乃至二〇米の結氷の爲めに通路を遮ぎられて全く進む能はず、されど此海岸は全く

北極に於けるオルレアン公の巡航探檢は今回の發見に係るもので、從來は一六七〇年にランバートランドとして僅かに陸地の存在を知られ、一七七五年に至りてデインス、パリントン氏に依りて北緯七十八度三十分と七十九度との間に於て陸地らしきものを發見せられたのみで、今日まで全く疑問として葬られてゐた、故に公の探檢は實に此地方の眞相を明かにしたもので、公は之より尙緯度二度半の北方まで探檢を續ける事が出來た、是れ恰も一八九二年ペアリー氏が西海岸で獨立灣を發見した地點である、若し然りとせば實に綠州（グリーンランド）四週海岸の全部を探知し得べかりしに、其の未探に終りしは憾みなきを免かれぬ、されど此の一行の貢献は尠くない。

猶此探檢中海洋學に關する調査は、曾てナンセン氏が豫想の如く綠州（グリーンランド）とスピツベルゲンとの中間の海底には、一の隆起帶があつて其の隆起帶は綠州（グリーンランド）の海岸を遠かるに從ひて益深度を減じ、四七〇米より五八米に減ずるを發見した、探

檢隊は其結氷のために進路を妨げられ、一時は全く氷中に封ぜられて豫期せざる冬籠をなさんとしたが、恰も風向一變して氷中を脱するを得て、白耳義國に歸着するを得た。

○飛行船と探檢

昨年七月上旬獨逸國ツエッペリン伯爵及びヘルゲセル博士が、同國皇帝の保護を得、飛行船によりて、北極探檢をなさんとして、既にメッツに到着した報を、得た、ツエッペリン式飛行船が此種の目的を達するに、今日最良のものたるは疑なきも、米國のウエルマン氏は飛行船によりて、同一の探檢を企て既に二回の失敗を重ねた、伯と雖成功を必する能はざるも、此擧は頗る之を壯とすべく、南極附近にシャックルトン氏が英國旗を樹立した如く、伯は北極附近に獨逸國旗

飛行船と探檢

を樹つるかも知れない。

要するに、極地探檢は空中飛行器と共に、世界の競爭題目と成つてゐる、誰か能く南極未檢の地に先鞭を着け、且つ諸科學の發展に貢獻するであらう！

兩極探檢記 終

明治四十三年八月九日印刷
明治四十三年八月十二日發行

兩極探檢記
定價金四拾五錢

著作者　吉川隆治

發行者　東京市日本橋區蠣殼町二丁目九番地　磯部辰次郎

印刷者　東京市神田區表神保町十番地　今成温平

發行所　東京市日本橋區蠣殼町二丁目九番地　磯部甲陽堂　振替口座東京一五〇五六番

不許復製

高橋淡水君著

壯絶悲絶 白虎隊

四六版洋裝二百十頁
口繪コロタイプ
（會津若松城。白虎隊の最後及墳墓。）
定價參拾五錢
郵稅金六錢

本書は白虎隊を中心とせる會津戰爭の顚末史也書中豪壯の少年あり或は纖手敵と抗せんとする可憐の少女あり或ひは一門二十一人國難に殉じ落花狼藉沈痛悲哀を極むる者あり悲劇以來落城の秋に至る光景紙上に活躍し一讀烈丈夫あり淸節梅の如き佳人あり或は征討軍に參謀を訪ふ武俠の神愁鬼哭文字也飯盛山上の慨あり眞に近時文壇の快

精神修養

座右訓

ポケット形總クロース美製本
定價金十五錢
郵稅金二錢

高橋淡水君著　村岡應東君口畫（高杉晋作出陣之圖）

勤王奇兵隊

四六版全一冊
二百十頁
定價參拾五錢
郵稅金六錢

本書は維新史に陸離たる光彩を發揮したる奇兵隊を中心とし人物に、木戸孝允、久阪通武、高杉晋作、入江兄弟等の故英雄、並に、山縣有朋、井上馨、三浦梧樓等の元勳あり、背景として亦誠忠の尼法師あり、俠美人あり、爛熳花の如き兒女あり千紫萬紅、縱横に動地の驚天となり、青年男女の好伴侶たる絶好の參考書として

松下塾門下の活動を叙したる風雲錄

近世史は精神修養の立身傳

也、書中活躍せる一讀卷を掩ふ能はざらしむ

長周日々新聞批評　有史以來の大改革維新の快擧は誰の手によつてなりしか原因は多かるべしと雖も然もわが長藩の先驅なりしなり一松下塾は實にその淵源といふも不可なし熱烈な愛國の赤誠は名利の外に超越して斷々乎としてその目的の貫通に努力するところありしなり今者淡水死生の間に出入せる志士を經とし當時の人情風俗を緯としわが奇兵隊を通じて當時の志士高心奇風等が如何に王事に奔走したるかを叙し來る文は飽くまで平易にして然も筆端に活氣ありて讀み心地よきこと甚だし消暑の好讀物として將た又た精神修養の一助として切に讀書子にすゝむ

中川內務書記官紹介山本瀧之助先生考案（諸名家閲覽）

訂正增版

新案常識カルタ

用紙上等厚紙讀札取札各百枚一組函入
定價金貳拾八錢　小包料金八錢

讀札『陸軍記念日は』取札『三月十日』を取る如く娯樂の傍不知不識の間に日常普通の智識を得せしむるにあり願はくば青年會並處女會の指導者及一般國民教育者の先づ一度之れを試用せられんことを願ふ

新刊

漢學研究

簡野道明先生序　尾池宜卿先生著

ポケット入
金文字入美製本
定價金四拾錢
郵税金四錢

如何にして漢學を研究すべき此書其津梁なり著者は博識書は親切を極む簡野先生序に曰く羅鍼を得て湖海に浮ぶごとしと苟も漢學志望者は須く一本を備ふべし

本書の特色

一　心得べき文字の數々
二　心得べき訓點及是非
三　心ず讀むべき書籍
四　必ず記すべき人名及著書目

90
572

96
522

026996-000-1

96-522

両極探検記

吉川　隆治／著

M43
ADH-0017